

河北新報普及センターと尚綱学院大がつくる名取のメディア

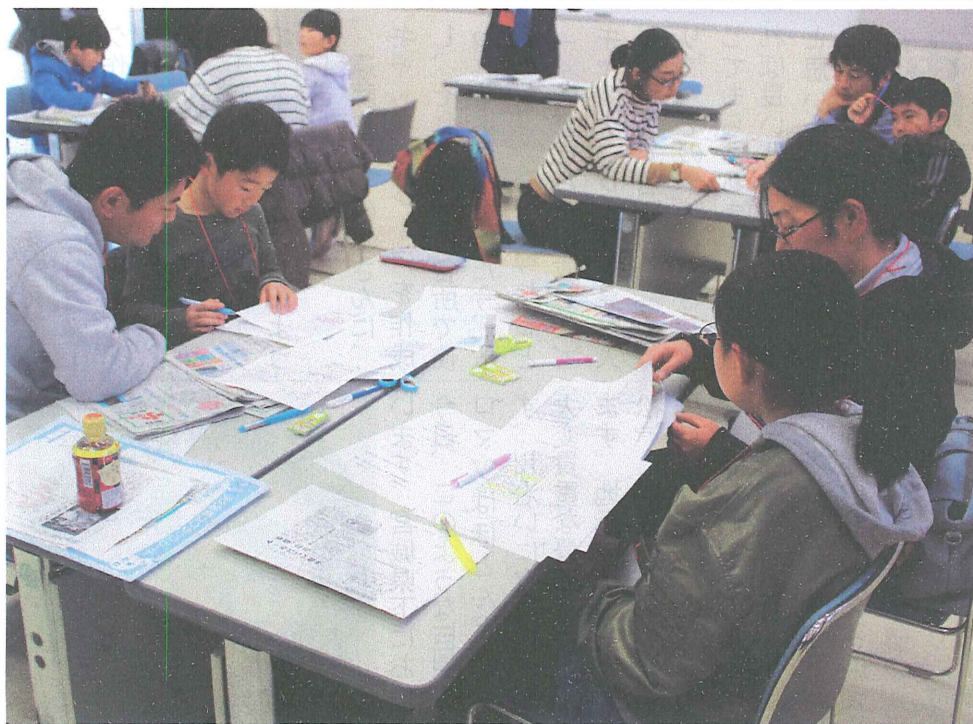
ハナモモ通信

2018年 12月



ハナモモちゃん

【発行】河北新報普及センター
 【協力】尚綱学院大 河北仙阪
 【エリア】名取市内
 【部数】11,600部
 【電話】022(266)2991



親子で賢く新聞活用 チャレンジわくわく子ども塾

「新聞で遊ぼう、学ぼう、楽しもう」をテーマにしたワークショップ「チャレンジわくわく子ども塾」(主催・河北新報普及センター/朝日新聞名取店 後援・名取市教育委員会)が、名取駅のプラザホールで8日開催されました。

11組の親子が参加し、14人の小学生が集まりました。イベント開始を待つ間にも、子どもたちは配付された新聞を読み始めており、とても明るい雰囲気の中でスタートとなりました。

参加者は、新聞を使ったクイズや新聞スクラップ、コラムの要約などにチャレンジ。親子で一緒に楽しく学ぶ様子が見られました。参加した佐々木雅典さんは「新聞スクラップなどを、



子どもが面白いと言っていました。新聞は子どもにも読ませておきたい」と話してくれました。

また、主催の朝日新聞名取店の見留晋作所長は「新聞を使った学びを、学校でも取り組んでもらえるよう活動したい。子どもたちには早い時期から新聞に触れ親しんでほしい」と語ってくれました。

新聞を読み、社会についてよく知っておくことは受験や就活など多くの場面で必要となります。皆さんも、家族と一緒に新聞に触れてみてはいかがでしょうか。

(石幡快)

河北新報普及センターは、新聞の読み方講座や活用方法、新聞記事の書き方、ことばの貯金箱などの講師を無料で派遣しています。子供会や学校授業、PTAの研修などに活用ください。

語らいマルシェ

学生有志団体が企画

18日、尚綱学院大で「語らいマルシェ」が行われ、今年で4回目を迎えるこのイベントは、学生有志団体「ヒトノワ」が企画、運営を行っています。商品の売買を通し出店者と学生、地域の方々のコミュニティの場を創りあげています。

県内外からさまざまなジャンルのお店が並び、毎回新しい出店者が参加、ヒトノワの活動も広がりを見せています。また、この日も多くの地域の方々が買い物に訪れ、世代を超えた語ら

いも見受けられました。今回初出店した「ゴーゴーカー」の吉田潤一店長は「応援したくなる活動です。集客力などに課題はありますが、これからも是非続けて欲しいイベントです」と笑顔で語ってくれました。

今回のマルシェではヒトノワのメンバーも出店する初めての試みがあり、「しらす石巻焼きそば」を販売していました。石巻焼きそばの特徴である出汁を使いソースも後がけというスタイルで、最後に閉上で加工されたしらすを上から振りかけ提供されていました。

多くの学生が「石巻焼きそば」の名前を聞いたことはあ



あるが、食べたことはない」と、昼食に購入していただきました。

今後「語らいマルシェ」を、学外で開催することも視野に入れ活動するそうです。メンバーも増え、活動の幅が広がってきたヒトノワに期待です。(庄子貴博)

発展途上国の現状を知って

フェアトレード商品販売

尚綱学院大では6日〜8日の3日間、環境構想学科の学生によって、フェアトレード商品の販売イベントが行われました。

フェアトレードとは、「公正な取引」のこと。発展途上国で生産された作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって、生産者の持続的な生活向上を支える仕組みです。フェアトレード商品を販売すること

で多くの人にこの取り組み

みや発展途上国の現状を知ってもらおうきっかけになることを目的としています。

このイベントでフェアトレード商品のチョコレートやお茶を販売していた環境構想学科3年の遠藤磨央さんは「この様なイベントを通してより多くの人たちに、立場の弱い発展途上国の生産者や労働者の現状を知って欲しい」と話してくれました。同じく庄子海斗さんは今後の活動に対して、「単発的なものにならないよう、後輩にもフェアトレードについて知ってもらいたい」と思いを語ってく



菊地美里・島田千緩



キャッチフレーズに 思いを込めて

10月1日、名取市は市制施行60周年を迎えました。これを記念して、名取市では、「めぐってみれば、つながりナトリ」をキャッチフレーズに、様々な記念事業が実施されています。

このキャッチフレーズは、尚綱学院大の学生が作成しました。作成者は、総合人間科学部表現文化学科3年の遠藤優佳さんと鈴木彩未さんです。

2人は、仙台高等専門学校の学生2人と組織されたロゴマーク・キャッチフレーズ制作プロジェクトチームのメンバーとなり、キャッチフレーズの作成を担当しました。

2人は昨年10月、尚綱学院大の教授から話を受け、プロジェクトに参加しました。それからは、名取市長や名取市役所の職員の方々と話し合い、「名取市が頭



に浮かぶ言葉」を考えてきました。また、ロゴマーク作成担当の仙台高等専門学校（高専）の学生とも、月1、2回の打ち合わせをしてキャッチフレーズとロゴマークのイメージが一致するようにしました。

遠藤さん、鈴木さんに、キャッチフレーズを作成し、それが名取市各所で使われるようになった今、改めて思うことを尋ねると「自分たちが作成したキャッチフレーズを見た人が、改めて名取市を『めぐって』、その素晴らしさを感じてもらえるきっかけになれば良いと思っています」と思いを語ってくれました。

（石幡 快）

市制60年記念 デザインマンホール

19日に開館した名取市図書館の入り口付近に、めずらしいマンホールのふたがあります。

市制施行60周年記念事業の一環で製作したデザインマンホールです。

JR名取駅のコミュニティプラザで配布されている「マンホールカード」によるとデザイン由来は「名取市の市花ハナモモと閉上の海を背景にした市木クロマツのデザインで、江戸時代仙台藩により植えられ、灯台代わりとも伝えられて



サケ故郷の川を上る 市民ら遡上観察

10月28日、名取市を流れる増田川でサケの観察会（主催・キラキラパルク増田西、協賛・増田西公民館）が行われました。

観察会には公民館が開く「おせでください！おんちやんおばちゃんわくわく子ども体験」に参加する15人の小中学生を含む55人が参加しました。

開催のあいさつでキラキラパルク増田西伊藤宗男会

長は「増田川を力強く上り産卵するサケの感動的な姿を見てほしい」と挨拶しました。

参加者は集合場所の増田西公民館から高館までの増田川沿いを歩き、散策途中元気よく川を上るサケや産卵を終え力尽きサケが流される様子を観察しました、サケを見つけると子どもたちから「あそこにいる、あそこにも」と大きな声が聞こえました。



こえました。

参加した名取で生まれ育った渡辺秀夫さん（77）は「地元においても、なかなかこのように川沿いを歩くことはない、自然と触れ合う機会が出来て嬉しい」と話してくれました。増田川に遡上するサケのことを尋ねると「自分が小さいころ、祖父母から増田川にサケが上ることは聞いていた」と古くから増田川にサケが上っていたことを話してくれました。

サケは、水の流れがあり、泥がたまらず川底の砂利が安定している場所に産卵し、来年1月下旬から3月中旬にふ化、5月から6月に川を下るそうです。

今回、産卵された卵も元気なサケになって増田川に戻って来てほしいですね。

**ハナモモ通信
プレゼント企画！**

大王製紙様から提供の「キレイナリ」を抽選で50名様にプレゼント！住所、氏名、年齢、電話番号、ハナモモ通信を読んだ感想、要望などを記入してメールかFAX、または郵便で左記まで。1月13日締切。

【住所】〒980-0002 2 仙台市青葉区五橋 1の1の10

【TEL】266-2991

【FAX】227-8333

「KFCハナモモ通信プレゼント」係まで。